

子宮がん検診（車検診）

動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から神奈川県の委託事業として開始され、昭和47年度から横浜市より委託が加入された。また、老人保健法試行に伴い、昭和58年度から実施主体が神奈川県より市町村に移行し、今日に至っている。

検診内容は、診察・子宮頸部からの細胞採取であり、横浜市立大学、日本医科大学、北里大学、東海大学、聖マリアンナ医科大学の各医学部産婦人科医師が担当し、当協会では細胞診断と検査成績の作成・通知・追跡管理等を行っている。

検診の内容、ならびに精度管理については、「子宮がん車集団検診実施検討会」(構成メンバーは上記各大学及び県立がんセンター、事務局は当協会)において検討されている。

結 果

2003年度の車検診受診者数は34,982名(初診33%)、50歳未満の若年層(37%)、50歳以上の高齢層(63%)の割合、年齢階級別では60歳代が最も多く、次いで50歳代、30歳代の順である。要精検率0.43%、要再検率0.45%、両者合わせた要再精検率は0.88%である。発見されたがんは35例で、子宮頸がん31例(扁平上皮がん27例、腺がん4例)と子宮体がん4例からなる。がん発見率は0.10%、初診に高く(0.19%)、若年層に高く(0.15%)、年齢階級別では、30歳以下0.14%、40歳代0.16%、50歳代0.14%、60歳以上0.06%である。早期がん(0期、1a期)が、扁平上皮がん27例中25例(93%)と、高率に検出されたことは、車検診の絶大な効果であり、当該症例の方々の人生に多大な貢献をしたことになる。発見された異形成は89例(軽度46例、中等度31例、高度12例)である。異形成発見率は0.25%、初診に高く(0.46%)、若年

層に高く(0.48%)、年齢階級別では、39歳以下0.58%、40歳代0.30%、50歳代0.13%、60歳以上0.06%と、加齢に伴って減少傾向を示す。

検出されたがん、異形成の子宮頸部細胞診クラス別検出率は、クラスⅡ再検19%、Ⅲa66%、Ⅲb81%、Ⅳ100%、Ⅴ100%であった。クラスⅡ再検は、要精検・精検不要の区別が出来なかった判定保留群であり、本来のクラス分類ではないので、感度、特異度などの精度管理総合評価の表現に利用できないが、頸がん3例(0期2例、1a期1例)、体部腺がん2例(Ⅰ期)、異形成21例を、誤陰性例にせず検出できたことは大きな評価となる。4例の頸部腺がんが、クラスⅢbから2例、クラスⅤから2例検出された。4例の体部腺がんはクラスⅡ再検から2例(前述)、クラスⅢbから1例、クラスⅤから1例検出されました。

本年度の子宮頸部細胞診精度管理総合評価(病変有無追跡確定率87%)は、感度100%、特異度99.9%、正診率99.9%、陽性的中率74%、陰性的中率100%と適正であった。

ま と め

子宮がん検診(車検診)のがん、異形成発見率は、初診に極めて高く、若年層に極めて高い。厚生労働省の『がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針』が2004年4月に改正され、子宮がん検診の対象年齢が、これまでの30歳以上から20歳以上に引き下げられました。県民の健康を守ることを目的に、我々は“いかにして、初診、若年層両者の受診者数を増加させることができるか”という課題に重点を置き行動してゆかねばならない。

関係の集計表は81頁に掲載